

ナズナ

牧 幸 男

3月、暦の上では立春が過ぎ、日照時間も長くなり気温が上昇する。野草もこの頃になると日当たりの良い場所から、芽を出すようになる。春の七草に選ばれている、ナズナもロゼット根*が大きくなり、葉の緑色部分がなくなる。この植物は生命力が旺盛なるため、邪気を払い一年の無事を願う風習として、七草粥には欠かすことのできない植物である。同時に、生命力の強さを好まれ、多くの武家から家紋(齋紋)に採用されてきた。注*: 茎が伸びずに、根元から葉が放射状に広がっている植物の形態。



ナズナの生育



主な葺の家紋：左から五つ葺、雪輪に六つ葺、八つ葺、平井筒に八つ葺



ナズナの花

ナズナは、北半球の温帯に分布しているごく普通のアブラナ科の1年または2年草の越年草で、いわゆる雑草の仲間である。ムギ栽培の伝来と共に日本に渡来した史前帰化植物と考えられており、非常に古くから知られていた植物である。越年生の草本で、地中に白い直根がある。全体に疎らな毛がある。春に茎の頂に長い総状花序をだして、夏にかけて白い花が咲く。生育環境は人間の活動領域に限られているのが特徴だ。白い花と三角形の果実をつける。春の七草に選ばれている。

ナズナの花は、下から上へと次々に花を咲かせる無限花序で、下の方で花が終わって種子が形成される間も、先端部では次々とつぼみを形成して開花していく。花後は順次、果実を結ぶ。果実は特徴のある軍曹形の倒三角形で、三味線の撥ばちに似ていることからペンペン草、シャミセン草(三味線草)、パチグサ(撥草)の別名の要因になっている。

子供の頃の思い出に、母が成長間近なナズナを摘み、遅ればせながら本格的な七草粥を炊いてくれたことだ。東京育ちの母は、長野県のナズナは小さいのでたくさん摘まなければならないから大変だと言っていた。

芭蕉は「一とせに 一度摘まるる なずなかな」と詠んだように、一年に一度だけ日が当たる植物である。『枕草子』(1001)には、花を鑑賞しない雑草類を数多く上げているが、ナズナもその中に入っている。

しかし、今日ではナズナの種類にアリッサムや白花の庭薺、或いは黄花の岩薺等の園芸種いわずなも生まれている。歌題に選ばれるのは、生活環境に密着していることから、身近な謡が多い。

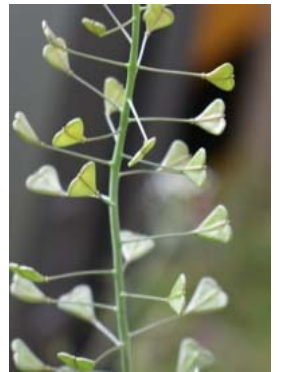
御園生*の なずなの茎も 立ちにけり 今日の朝菜に 何を摘み 曾根好忠(923? ~没年不明)

この短歌では、平安時代の公家がナズナを食生活に加えていたことがしのばれる。注*: 「み」は寝語で、植物を栽培する園を尊んでいう語。

草屋根に ペンペン草の 丈のびて 夏うらがなし 旧き町並み 木俣修

古畑や 薺摘みゆく 男ども 松尾芭蕉

里人に 摘みきてただす 薺かな 富田木歩



ナズナの果実

植物名は、「日本名は撫菜の意味で、愛ずる菜の意味かと思われるが明らかでない。ぺんぺん草は果実の形が三味線の撥に似ているからである。漢名は齊である。」と牧野富太郎博士は述べている。又、早春に開花して夏に枯れることから「夏無き菜」、つまり夏無から変化したという説、撫でたいほど小さく可愛い花の意から、「撫で菜」から転訛化したという説、朝鮮古語のナジから「ナジ菜」となり変化したなどの説がある。李時珍(158~159)は「齊は生ゆること、済済たり故に齊という」と述べ、盛んに生えている草と解釈している。別名は、身近な植物だけにたくさんある。ぺんぺん草、三味線草、撫菜、地米草、奈都那、夏無等がある。それぞれの由来は前二者は、果実の形が三味線の撥に似ているから、撫菜は愛ずる菜、或いは「撫つ」は「打つ」の意味があり粥にするのである。七草の「七草なずな 唐土の鳥が日本の土地へ渡らぬ先に 七草たたいて トントントン」の繰り返す囃しは、まな板の上で包丁で叩くことの由来による。また、七草粥に使うから、ナズナは『倭名類聚抄』(934)では漢名を齊の和名にした、夏無は、秋から冬を経て春に開花して終わる植物で、ナズナの一生に夏がないからである。他にガラガラ、チャンコチャンコ等、たくさんの方がある。

学名は、*Capsella bursa-pastoris* で、属名はラテン語の小箱いゆる囊、種小名は羊飼いの財布の意で果実の形によっている。

薬用は、生薬名を齊菜と呼ぶ。『神農本草経』(250~280 頃編纂)や『名医別録』(502~536)に収載され、古くから薬用にしてきた。全草を尿、止血に、根及び葉の黒焼きを下痢止めに用い、葉の乾燥したものを敷物の下に敷けば蚤の発生を防げると『本草綱目』(1590)に記載がある。中国の『植物名実図考』(1880)には「肉食する者はナズナを食べると胃腸が洗われるので、俗に浄腸草ともいう。」の記述がある。

食用は、灰汁が強いのでよく茹でこぼすことが大切、独特の香りが食欲をそそる。中国では、齊菜、齊とよばれ野性の菜では美味とされ、栽培もおこなわれていた。

花言葉は、「あなたに私の全てを捧げます」「貴方に全てをお任せします」である。

「ぺんぺん草が生える」

- ・街の中で、生々していた家や蔵などが消えると、すぐ空地にナズナが生えてくる。家運の傾きを示している訳だが、式亭三馬(1776~1822)が「こほろぎやぺんぺん草のはえそうな屋体骨」と書いたことに由来している。
- ・司馬遷が編纂した『史記』(BC206~208)の収載は、「麦秀の嘆」の故事に殷(16BC 頃~BC1046)時代の最後の王で暴君として知られる紂王(帝辛)(没年BC1064 頃)がなくなってから、箕子(紂王の叔父(生不明没BC1046)が旅の途中王宮の跡を訪れると荒れ果て麦が茂っていた。それを見て嘆いたのがこの故事である。「国の滅亡の嘆き」とも呼ばれ、ぺんぺん草の茂る様子と同じと比喻されている。

「ぺんぺん草も生えない」

荒廃した場所で育つナズナでさえも生育しない様子から、転じて何も残っていない状態、一切合財が残らない状態を揶揄した表現である。同じく「麦秀の嘆」では、国が滅亡したことを嘆き悲しむことを意味する故事成語でもある。「栄えていた国の都が滅び、その跡地に麦の穂が伸びているのを見て、故郷の変わり果てた姿や国の滅亡を深く悲しむ気持ちを表している。」賢臣の箕子は紂王(帝辛)をいさめたが、聞き入れられず、国は乱れ、最後は周(BC1046~BC771)に滅ぼされた。箕子は、後に周の都へ向かう途中、かつての殷の都の跡地を通った宮殿の栄華はなく、ただ麦の穂が寂しく伸びている(麦秀) 荒れ果てた光景であった。この光景に深い悲しみに襲われ、「麦秀歌」詠った。「麦秀歌」の内容は

麦 秀 漸 漸 兮：麦の穂が次第に生え揃い

禾 黍 油 油：禾や黍がうるわしく盛んに生え茂っている。

彼 狡 僮 兮：あの悪童(紂王)よ

禾 黍 油 油：我を好からなかった

不 與 我 好 兮：私と彼は折りが合わなかったが、今はもうない、である。



ナズナ

